

ボルネオ島従軍記

京都府 新宮 千秋

私は水遊びが好きで、五歳の時に夏になると近所の先輩などに連れられて、川遊びに行ったのを覚えていますが、どんなことが原因かは分かりませんが、右側の耳に水が入り、激痛を感じ母親と医者に行った。そして当時の医療技術の未熟のせいか全く聞こえなくなり、それ以後は左側だけで生活をして現在にいたっており、今では、これは自然現象だと思っている。

私は昭和十一（一九三六）年三月に綾部尋常高等小学校の高等科二年を卒業し、一年余り神戸で丁稚奉公をしていたが、突然犬に吠えられ不注意にも自転車ごと倒れて足を怪我し、その後、綾部に引き揚げて地元の会社に就職した。

しばらくして満州事変が起き、舞鶴海軍工廠も職員募集を始めたので、せっかく勤めた会社に見

切りをつけて私も知人の紹介で幼年工として海軍工廠に入廠した。午前中は仕事を習い、午後は廠内の青年学校で一般教養と軍事訓練を受けた。

— 国語の講義の中で未だに脳裡に焼き付いた言葉がある「恋愛は人格と人格の接触だ」と、その時の教官は海軍中佐だった。十九歳の時当時としてはあこがれであった少年航空兵の試験を受けたが耳が悪いため不合格、二十歳になつての徴兵検査も第一乙種で入隊は出来なかった。

一方戦況はどんどん進み、海軍はジャワ島、ボルネオ島、スマトラを占領し、陸軍は中国の大連からシナ海に沿ってシンガポールへと破竹の勢いで進撃をしていった。海軍工廠も若い工具は出征して行き、学徒動員の女学生と高齢者の職場に変わり、同級生などは皆な戦争にかりだされ、残った若い者は肺病の患者か体に障害のある者と女性ばかりで、私は我慢出来ずに、上司である山崎技師（大佐待遇）に、技手を通じて南方の艦船修理を申し出ました。

海軍としてもいざれ故障する艦船がでるということから舞鶴海軍工廠も派遣することが決まり、各部署、造船、造機、兵器から合計九人の者が選出され、私もその中の一人になった。

広島のと舞鶴からの者は横浜の総持寺で合流し、横浜港からの出航日を持ち、その間、出発についで注意事項などを聞いて昭和十七年六月上旬に出航、一路ボルネオ島のバリクパパンへと向った。

バブとジョンゴス

途中サイパン、パラオに寄港し、目的地バリクには出港してから一カ月目の七月上旬に無事到着した。私の任務は、船艇修理と燃料廠内の機械設備の修理、修復、新設、それに町全体の設備の修理、点検で、その中には二十キロほど離れた川上の水道のポンプ修理などもあった。私の所属部署は廠内の造修部で、部内には一通りの設備が整い、現住民にはインドネシア人、華僑、メナド（セレス）が多く働いており、その指導と監督が仕

事の内容である。

私達の宿舎は、造修部の裏の小高い丘に立ち並んでおり、眼下は港、かなたには岬が望まれ、海には漁船と帆船がまばらに見えて、朝夕窓辺に寄っては心をなぐさめたものである。

坂道の途中には華僑の経営するレストランがあり、一日一回は立ち寄るのが常であった。この宿舎はもとオランダ技師と、その家族が住んでいたもので神戸の異人館風な建物で、その一軒に呉の十人と舞鶴の九人が合宿することになった。

宿舎一軒ごとにジョンゴス（下男）とバブ（女中）が一人ずつ配置され、軍の民生部がその人事を担当管理し、日本人の周辺の世話をしていた。原則としては夫婦者の住み込みであったが、私達の宿舎はどういうわけか例外でジョスは独身、バブは夫婦者であった。

宿舎の間取りは、玄関ホール十畳を中央に、両側に寝室八畳が二部屋ずつ計五室あり、廊下を渡ってジョンゴスの部屋、続きに倉庫二部屋、台所、

風呂、便所があり、鍵の字に曲ってバブ夫婦の居間があった。バブの主人は土工で毎日まじめに仕事に通い、性質はいたっておだやかで、十歳の子供が一人いた。

ここ南国は年中常夏で、朝五時ごろから夕方八時ごろまで日が照っていたが、海岸が近く宿舎が小高い丘にあったためかさほどむし暑さはなかった。私達は毎朝七時半には朝食を終えて、すぐ下の仕事場へ通い、夕方五時には特急作業のない限り帰宅、それぞれの趣味に興じるなどが日課で、とても前線で生死をかけた戦闘が繰り返されていくなどとは思えない平穏な暮しであった。

バリクパパン出発

私達軍属九人は、舞鶴海軍工廠よりボルネオ島バリクの第一〇二海軍燃料廠に派遣され、昭和十九年四月、無事二年間の軍務を終えて、いまバリクを離れようとしていた。船は汽笛を響かせ、徐々に栈橋を遠ざかって行つた。南国特有のガラガラとまばゆい空、平穏そのものの港の景色、さまざま

まの思いを胸に、私達は甲板で手を振り、別れを告げた。

栈橋から五百メートルぐらい離れた時、突然大音響と共に六、〇〇〇トンの巨体が浮きあがり、その瞬間に船が傾いた。「あつ」と思ったが声も出ず、甲板を右往左往するだけ、しかし、不幸中の幸いで港内は浅くすぐに船底が海の底についた。船からSOSが発信されたのか、栈橋よりランチの群れが全速力で蹴たてて近づき船を取り囲んだ。しばらくして荷物まとめてランチに乗り移り、ようやく上陸したが、その時の恐怖は強烈で、なかなか治まらなかったのを今なおよく覚えている。私達がバリクに着任して一年余りは平穏無事で、前線といつてもはるかに遠いソロモン諸島であったため、この辺は平和そのものであった。ソロモンの戦況不利が伝わるころは、それに呼応するようになり、バリクの空にも敵機が飛来するようになり、その時に敵は機雷を敷設し、我々の帰還船はそれに抵触したのだろう。

その事件後一カ月経って、再び船に乗り込み帰国の途についたが、その時の後遺症が心に残り、シンガポールまでびくびくの海路であった。途中で、船にはもう一つの任務があるためビントアン島に立ち寄って、アルミの原料の真赤な鉱石（ボウキサイト）を一日かけて積み込み、次の寄港地シンガポールへと向った。

シンガポール寄港

私はバリクに滞在中、アメーバ赤痢の疑いで入院したことがある。常に軟便で、そのことを船医に申したら、シンガポールの病院に案内すると申され、同時に船長からも下船の許可を頂いて検査入院した。検査の結果は、アメーバ赤痢菌はおらず、退院する時船員の案内で市内を見学することが出来てラッキーだった。

シンガポールからは航空母艦・駆逐艦・貨物船四隻と堂々たる船団が組まれて、心強さを感じながら一路祖国へと向った。シンガポールから乗船された水兵の中に偶然にも綾部小学校の一年上の

先輩の竿さんに出会い、互いに元気を祝い、積る話の花が咲いた。彼の話によると艦が沈没して海中で泳いだ時の怖かった話など聞かせてくれた。彼は今休養のため内地に戻り、再び戦地に向うそうである、無事に任務が終わるよう祈った。

航空母艦からは飛行機が毎日のように飛び立ち、空から偵察と護衛を行っていた。潜水艦は海中深く潜り、夜に浮上して攻撃をしかけるやつかいな艦艇であるが、それをくぐりぬけて昭和十九年六月無事に下関港に着き、二年振りに綾部駅に着いた時に一番に思ったことは狭いなということであった。

駅には父が迎えに来ていた。家では田植の最中で、私もその足で田圃に出て、大勢手伝っている近所の人に帰還の報告と田植のお礼を申し上げた。

戦争への思い

石油の町バリク・パンとは「板がひっくり返る」という意味で、昔台風でよく小さな漁船がひっくり返った、そのためにこの名がついたということ

である。

そのバリク・パパンはボルネオ島（現インドネシア領東カリマンタン州）にある。昭和十七年七月には二万五千人ほどの小さな町であったが、現在では人口四十五万の大都市になっている。港周辺には、石油基地として巨大なタンクが整然と並び、東アジア石油輸出港として賑わいを見せていた。

オランダ人二百人、現地人六千人の堂々たる会社で、原油は九十キロ奥地のサンガサンガなどからパイプ輸送され、年間百六十万キロリットル処理されていた。石油の不足に悩む日本は、太平洋戦争の緒戦に、この石油基地を掌中に収めることが出来たが、海軍は破壊して逃げた跡の石油基地の修復に全力で取りかかり、昭和十七年の暮れにはほぼ元の通り運営が出来るようになった。

この石油基地を守るために、第二十二特別海軍根拠地隊が駐屯し、砲台の設置など軍備も次第に整ってきた。そして昭和十八年の末ごろまでは、バリクの町は平和で街には歌声も流れていた、

「支那の夜」「ブンガワソロー」等がよく歌われた。

第二百二燃料廠消滅

昭和二十年、戦局は硫黄島玉砕、三月には比島マニラが陥落するなかで、六月十五日、燃料廠では「一〇一号作戦」と称する石油基地破壊作業の命令が発動された。六月二十日午前零時、第二百二燃料廠は正式に解散となった。連日敵の攻撃によって周囲のタンクは炎の海になり、廠舎の上を、サマリダ街道に布陣していた日本軍陣地に弾丸が向けられるようになった。

この時になって、いよいよ「総員撤退」「次の任につけ」の命令が下った。燃料廠は敵の攻撃に加えて、かつてオランダが逃げる時、自らの手で石油設備を破壊したと同様に、今度は日本軍自身が破壊作業を行ったのである。そしてここに第二百二燃料廠は消滅した。

かつてオランダの会社が建設した燃料廠を自らの手によって破壊し、それを日本が復旧して三年間使用したものの、また石油施設を破壊し、そし

て終戦を迎えて新たにオランダの会社によって設立され、現在に至っている。

この間に失われた膨大な資源と資金、そして尊い人命の喪失を私達はどのように考えたらよいのであろうか。地球を創造された神がもしあれば、これほどのムダづかいをどのように見つめていられるのであろうか。地球のどこかで戦いは起きている、果てしなく…。戦争ほどムダなものはない。

【解説】

体験記筆者は幼年工として舞鶴海軍工廠に入廠、仕事と教養教育と軍事訓練に明け暮れる。十九歳になって、憧れだった少年航空兵の試験を受けたが、体験記にも記されているごとく耳が悪くて不合格、徴兵検査も第一乙種で入隊出来ず、軍属としてボルネオ・バリク・パパンの燃料廠へ赴任する。この体験記は同燃料廠における体験をつづっている。

筆者の任務地はバリク・パパンにあった第百二海

軍燃料廠で、昭和十七年二月、バリク・パパン製油所第三作業部長として渡辺三郎海軍大佐が任命された。

そして、三菱石油を中心とした三菱系の諸会社から職員を徴用して、独立した燃料廠とするため要員五百人を編成、その先発隊としての調査スタッフは、三月三十日、横浜を出発し、バリク・パパンに着いたのは四月八日であった。

その後、復旧作業は急速に進められ、第二蒸留工場も稼働、昭和十七年末には、全力運転に入った。

「バリク・パパン」とは「板がひっくり返る」という意味で、昔台風でよく小さい舟がひっくり返ったので、この名前がついたという。

昭和十七年七月ごろは、二万五千人ほどの小さな町であった。南国情緒あふれる椰子の林がどこまでも続く海岸は遠浅で、夜ともなれば、月光の下、そよ風にゆられて、何とも言えぬムードがただよう。

そして、港周辺は、石油基地としての設備が建設されて、数十もの巨大石油タンクが群立し、東アジア石油輸出港として賑わいを見せていた。

体験記は、このような石油基地街での生活の様相を描いているが、ここの航空機用潤滑油は良質で、かつ豊富なため、石油不足に悩んでいた日本は、太平洋戦争の諸戦においてこの石油基地を掌中に収め、海軍は直ちに破壊された石油基地を復旧するため、国内より技術者を派遣して、その復旧に取り掛ったのである。

一方、この石油基地を守るために、第二十二特別海軍根拠地隊が駐屯し、砲台の設置、航空隊の開設。水上基地の建設と、石油の町は軍備を整えていったが、ソロモンの戦況が厳しさを増すにつれて、バリクパパンも臨戦の軍基地へ変貌していった。

筆者は、このような資源を囲む戦争の消長の中に身を置いて、青春の一時期を体験する。そして、膨大な資源・資金、尊い人命の喪失の峻なす歴史